



■ はじめに ～なぜ被災地に行ったのか

震災後、私たちは、日本社会の未来のために一体何ができるのかと考える中で、義援活動として「人事労務に関する緊急対策レポート」を配信してまいりました。

今回、環境とCSRと志のビジネス情報誌『オルタナ』を出版する株式会社オルタナがこの「東日本大震災・復興支援バスマッション」を実施するにあたり、この緊急対策レポートを現地の方々へ直接お届けしたいと思ったのが、参加を決めた動機の一つです。

同時に、震災直後の”モノの支援”の段階から進み、今は”人の支援”へと体制が変わり目におかれていると言われる中で、改めて私たちは何ができるのかを考え行動に移すべく、参加しようと決意した次第です。

東京駅を出発する際は、「現地には、新聞やテレビなどから流れる画像では伝わらない何かがあるのではないか」と考え、今後の弊社の事業や私自身の人生に役立てる心積もりでいました。

しかし現地に着くと、想像を絶するほどの街の廃墟、そして恐怖すら感じる自然の猛威。私たちは自然に生かされている、私たちは謙虚に自然と向き合い共生していかなければならない、そのような思いを強くした次第です。

東北の第一次産業が壊滅的な被害を受けた今、日本の”働く”の原点とも言える「農」の分野が存続の危機にさらされていることは、日本の国柄そのものが変わってしまうのではないかと、いう危惧すら感じています。

私たちは業種柄、さまざまなお客様とご縁をいただいておりますが、
このご縁を一つのエネルギーに変え、共感資本を中心とした新しい日本型資本主義のルール
のもとで真の”働く”の意味を考えていく必要があります。
関わりある方々からいただいたエネルギーをどのように社会に還元していけるのか、襟を正し
て考え、前へ進んでいこうと思っております。

■ いざ被災地へ

4月23日の朝、深夜バスに揺られ、熟睡したとはいいがたい状態で笹氣出版印刷株式会社の敷
地内に入りました。そこで笹氣社長の話に参加者一同は耳を傾けました。

3月11日の震災時、笹氣印刷でも会社の建物や社員の住
宅に被害を受けたが、社員たちは自身が被災している中、幾
人もが職場に来て休日返上で復旧作業を頑張ったといいま
す。これらは、他の国ではあまり見られない光景ではないで
しょうか。まさしく世界が賞賛する日本人に流れるDNA、日本
的経営が明らかになったのです。



次の仙台青年会議所の齋藤理事長の話では、震災から1ヶ月以上が経つ現在でも、毎日被災地
は人手が足りていない状態のまま人々は不安の中に生活しているとのこと。休日は全国から支援
者が駆けつけてくれるとのことですが、休みの日だけでなく、ぜひ平日もボランティアに来て欲しいとお
っしゃっていました。実際、徐々に報道なども少なくなってきたり、神戸の震災の時もマスコミが目し
たのは3ヶ月ほどであり、あとは全く報道がされなくなりました。しかし、実際には復興までに15年かかっ
ており、この東日本大震災で生まれた国民全体の思いを風化させないで欲しいと言われていました。
また避難所の様子も少しお話頂きました。避難所の中でも仕事がある方は、スーツを着て朝職場に出
て行かれるそうですが、働きに行くことができず昼間から何もせずに避難所で寝ている方もいらっしゃる
とのこと。そのほとんどが、海や田畑など“自然”を働き場所としていた第一次産業に従事される方たちの
ようです。

■ 仕事が出来ないことがつらい

次にまたバスに乗って石巻に向かいますが、その途中に見るも哀れな工場がひとときわ目を引きました。
それは、ニュースなどでも今回印刷業が大打撃を受けたと聞いていましたが、まさしく日本製紙の石巻



工場の変わり果てた姿でした。その後は、次々と被災した建
物が目に飛び込んできて、途中小雨が降りしき中、大きな
空き地を通りかかりました。まるで大きな畑の畝のようなものが
並んでいて「なんだろう」と車窓から覗いてみると、白い棺が4

つ並んで、側で黒服を着た神父さんがお祈りを捧げていました。

石巻での最初の訪問地は、本田水産株式会社の本田社長の水産加工工場でした。石巻市は海辺の市場はほぼ壊滅状態となりましたが、工場がある場所は外見では比較的被害がないように見えますが、工場の内部はやはりめちゃくちゃな状態でした。

この会社は従業員が 100 名いるそうですが、そのうち 6 名が亡くなったということです。ニュースでも話題になりましたが、この近くの被災地においても、中国人研修生を避難させた経営者が津波にさらわれ亡くなったそうで、中国では日本人の美德をあらわす話として広まっているそうです。



次に、狩野さんというあわび漁をしている漁師の方の話を聴きました。陸の瓦礫も大変だが、海の



瓦礫は、素人では撤去が難しく海の瓦礫の撤去が進まなければ漁はできないといいます。しかし、国は陸の補修を優先しており、その陸でさえトラックやユニックがないので船を運ぼうにも運べないと嘆いていました。そしてお話の中で、船やカッパを始め、生業の道具がなくなったことがつらいと狩野さんは、涙ぐみながら話を続けます。そんな中でも、全ての漁師がどんなことがあっても漁師を続けるといいます。津波で流された船の3割はまだ修理すれば

使えます。ただ、心無い人がいて、修理できる船の底にわざと穴を開けたり、船外機を盗んで持っていつてしまう者がいると嘆いていたのは、とても残念でした。今回お話を聴かせていただいた方に共通して皆さんが仰っていることですが、「他の地域から支援物資をいつまでもらって何もしないわけにはいかない」「食えることは確かだが、仕事が出来ないことがつらい」といった印象的な言葉がとても胸にズシンときました。



石巻に入りはじめてここは被災地なのだということが伝わってきました。

映像からは伝わらない、あの魚が腐ったような町の臭いや行き交う自衛隊員、重機の動き、家々の壁にのこる水位の一直線のしみに、「ここまで水がやってきたのか」と思わず視線をそらしてしまいました。

■ 「女川の町は、俺たちが守る！！」

石巻を後に、次に向かった先は女川町ですが、そこでまず目に飛び込んできた光景は20メートル近いビルが横向きに倒れている姿です。また向こうでは乗用車がビルの上に乗っかっている。通常はありえないことであり、少し頭の中が混乱してしまいます。そこかしこにあるはずの建物が原型をとどめていません。そして、そこに遺体が埋まっているとはどうも思えなく、きっと海に流されたに



違いないと一人心の中でそう思わずにはいられません。これが、廃墟というものなのだろうか。廃墟という言葉は知ってはいましたが、体験するのは初めてのことです。

そして、病院が建つ小高い山から町全体を眺めてみると、病院の1階の壁に残る線から、この上野山ぐらいの小高い山にも津波が来たことがはっきりわかります。あらためて私たちは、自然に生かされているということを実感できました。そしてふと前方に顔を向けると、女川の象徴的な建物に垂れ幕が下がっている。「女川の町は、俺たちが守る！！」そこに私は、女川の人たちの郷土愛の高さを感じました。これが、もし東京で起きた場合は、どうなのだろうか?という思いと共に。|



■ おわりに ～これからのボランタリー経済において私たちができること

私たちは、被災地域の方々に対し、私たちのご縁ある皆さまと共に、これからの経済の新しい形である「ボランタリーな経済行為」を推進して行きたいと考えています。

具体的には、有限会社人事・労務と弊社が母体である日本ES開発協会との協働で、添付のご案内のとおり「東北農援団プロジェクト」への参加を呼びかけ、東北の農家、漁師、林業の皆さんの雇用創出、日本のふるさとの元気を支援していきます。

「農」は、日本の働くの原点。農業が廃れることは、日本そのものの誇りある仕事観を失うことだと私は考えます。

ぜひ、「日本の未来の働くを創造する」ためにもご協力ください。

また、今回訪問した被災地域からは、下記の支援要請をいただいています。

- ユニック車2台
- 避難所の方々のメンタル面のケアしてくれる方
- 船(小さな船外機でも可)
- 自動車(中古車も含む)
- 中学生が部活等で着られる運動用ユニフォーム

甚大な被害を受けた地域の一つである南三陸町では、5月29日に「復興市」が行なわれます。

Webやさまざまなメディア等でその宣伝を行ってくださる方を必要としています。

また、木工の商品を流通してくださる方はいらっしゃいませんか？

宮城の工芸品をぜひ全国の皆さんに届けてください。

上記のような支援は、(社)登米市観光物産協会、南三陸商工会、JFみやぎ志津川支所、JF南三陸志津川支所、南三陸町森林組合という5つの団体から要請をいただいたものです。

各団体への連絡は、日本ES開発協会、および弊社が副代表幹事を務める株式会社オルタナ主催の「グリーン経営者フォーラム」を通して、行わせていただきます。

皆さまとのご縁から生まれる力を、ぜひ被災地域の復興のために、日本社会の未来の”働く”のためにつなげていきたいと考えています。

今後ともよろしくごお願い申し上げます。

以上の情報についてのご質問などは、(有)人事・労務までお問い合わせください。

有限会社人事・労務

(本社) (新潟支社) 〒940-0064
〒111-0036 新潟県長岡市殿町 2-3-9-3F(崇徳館内)
東京都台東区松が谷 3-1-12 TEL0258-37-5566 FAX0258-37-5595
松が谷センタービル 5F
TEL03-5827-8217 (横浜オフィス) 〒212-0058
FAX03-5827-8216 神奈川県川崎市幸区鹿島田 974-13
(e-mail) info@jinji-roumu.com クォーターキューブ新川崎 202
(URL) <http://www.jinji-roumu.com> TEL044-522-6580 FAX044-522-6820
日本ES開発協会 (URL) <http://www.jinji-es.com/>